

受賞講演

ピースメーカーとしての共同作業

フィリップ・A・ポッター博士

第4回「庭野平和賞」受賞者に私が選ばれましたことを、深い荣誉と考えております。庭野平和財団は、そのきわめて仏教的考え方から、私を含めてこれまで3人のキリスト教徒に「平和賞」を与えておられます。仏教——特に日本に見られる形の仏教、中でも立正佼成会に代表される形の仏教は、普遍的な視野を有し、万物の本性である生命（いのち）はそれがいかなる形態をとってしようとも、相互に関係し依存し合っていると説いています。キリスト教もまたこの普遍性という特性を有しており、人間と人間の関係、人間と万物の関係を中心にすえるという特質を分かち持っております。私はこの「平和賞」を、仏教徒とキリスト教徒とのあいだに高まりつつある対話のしるしとして、よろこんでお受けしたいと考えております。また私は、「oikoumene」、すなわち、この「万物の住む地球」のすみずみまで、正義と平和が行き亘り相互に関係し依存し合ったわれわれの生活がそこに存するということを確信するものであります。

この「平和」という名を冠した賞を私がいただくということは、いささか皮肉な感じもいたします。1972年から84年まで私は、世界教会協議会（WCC）の総幹事を務めておりましたが、その間、マスコミからは絶えず、武力闘争、テロリスト、暴力による体制破壊を支持する者、というように描かれておりました。特に、私の生まれ育った被搾取第三世界においてはそうでした。これについては私は、しばしば心の傷む思いもいたしましたし、また、この私に与えられた誤ったイメージを正すということについては、私の仲間のキリスト者たちもほとんど有効な手立てを打つことができなかったのではないかと感じております。それだけになお、2月14日付の貴財団発行のプレスリリースにもありましたように、この仏教精神を基盤とした財団が、あの私に与えられたイメージの裏にあるものを探り、私の主張せんとしていたことに何らかの理解を示してくださったということが、ひとしお喜ばしく感じられます。

ここで皆様方のお許しをいただき、いささかの時間を割いて

Working Together as Peace-makers Message

Address by the Rev. Dr. Philip A. Potter
On Being Awarded the Niwano Peace Prize

I feel deeply privileged and honoured to be the fourth recipient of the Niwano Peace Prize. In a characteristically Buddhist way, the Foundation has awarded the prize for the third time to someone from the Christian tradition. Buddhism, especially the form represented in Japan and conspicuously by the Rissho Kosei-kai, is universal in outlook and teaches that the fundamental reality of life in all its forms is relationships. Christianity shares these characteristics of universality and the centrality of relationships between persons and between them and creation. I gladly accept this prize as a sign of the growing dialogue between Buddhists and Christians in affirming our inter-related life in justice and peace throughout the *oikoumene*, the whole inhabited earth.

It is somewhat ironical that I have been awarded this prize for Peace. During the years when I was General Secretary of the World Council of Churches (1972—1984), I was constantly portrayed in the media as supporting armed conflict, terrorists and the violent overthrow of régimes particularly in the exploited Third World from which I come. It was often a painful experience for me, and I am afraid that my fellow Christians did little to correct that image. It is all the more gratifying that a Buddhist foundation has decided to go behind the image and recognise some of the things I stood for, as was expressed in the press release on 14 February.

May I crave your indulgence by sharing with you a few moments in my own biography? When, at the age of sixteen, I matriculated from secondary school in my island home of Dominica in the West Indies, I followed other youths in joining the volunteer Defence Force. But it was only for one afternoon. It suddenly struck me, while on parade, that I could not conscientiously use arms against others who share with me a common

私自身の生い立ちをお話したいと思います。16歳の折、西インド諸島の故郷の島ドミニカで中学校入学を許された私は、ほかの若者たちの例にならって国防義勇軍に入隊いたしました。しかし、この私の入隊は、わずか半日間で終わりました。というのは、行進に参加しているうちに突然、私自身の中に、自分の良心に従うならば、けっして自分と同じ人間性を有する他者に対して武力行使することなどできないだろうという思いが襲ってきたからです。その後、私は私なりの奇妙なやり方で、平和主義者となりました。私は、平和主義者の団体に加入したことはありませんし、人間の権利を守るため、また、内外からの侵略に対して自分の国の統合や安寧を守るための最後の手段として、良心に従って武器をとらざるを得なかった人たちより自分が優れているなどとは考えたこともありません。私が固く心に誓ったことというのは、虐げられた人たちの団結を通じ、また、非暴力的手段をもって、人間の尊厳、正義、平和の追求に自分の人生を捧げるということでした。その当然の結果として、政治的、人種的、社会経済的、文化的、そして宗教的な闘争にかかわる多くの物議を醸し出す状況下に置かれることとなりました。これは、私が、カリブ海地域をはじめとして、国際的に人類同胞に奉仕する仕事についてきたこの40年近くのあいだずっと続いてきたことです。しかし私は、これについていささかの後悔もしておりませんし、また今後も、人類の幸福を追求する仕事に喜んで自分の余生を捧げるつもりであります。

いま一つ、記憶を呼びさましてお話したい体験が私にはあります。それは、日本の人たちが決して忘れることのできない日、すなわち、あの1945年8月6日という日に私が体験したことです。当時私は、ジャマイカの農村地域でワークキャンプに参加し、コミュニティーセンターを建設する仕事に加わっていました。あの日の朝、私たちは祈りの時間に、イエス・キリストの姿容を語った一節を読んでおりました。キリストが、宗教と政治の結託した権力によって十字架にかけられるべくエルサレムに向かう前、三人の弟子と共に山上で深い祈りと瞑想にふけるくだりです。これによると、そのときキリストは、目の前にはっきりと見えるように、いにしへの二人の人物との対話を行ったと書かれてあります。この二人の人物というのは、一人は、奴隷となっていたイスラエルの人々をエジプトから解放した指導者であり、神のおきて、あるいは神の教えを伝えたモーゼのことで、いま一人は、人々が政治や文化を都合のいいように解釈してつくりあげていた偶像に疑いを投げかけ、真の平和をもたらす唯一のものとして、信仰と正義の道に人々を再び導いた預言者、エリヤです。言い伝えによると、このとき目を



ジャマイカ・キングストンでの夫妻(1986年)

humanity. I became a pacifist, though a peculiar one. I have never joined any pacifist organization and have never felt superior to those who in conscience have been constrained to take up arms as a last resort in the defence of human rights or the integrity and welfare of their nations against external or internal aggressors. What I did pledge to do was to devote my life in the pursuit of human dignity, justice and peace in solidarity with the oppressed and through non-violent means. That naturally involved me in very controversial situations of political, racial, socio-economic, cultural and religious conflicts during the almost forty years that I have been privileged to serve my fellow human beings internationally as well as in the Caribbean. I have never regretted it, and will continue joyfully to commit the rest of my life to work for the well-being of humanity.

The second experience I would like to evoke is a date which the Japanese people can never forget—6 August, 1945. I was participating in a work camp in rural Jamaica, building a community center. That morning, in our devotions, we had read the story of the transfiguration of Jesus. He was on a mountain with three of his disciples in intense prayer and reflection before going to Jerusalem where he would be crucified by the combination of the religious and political authorities. The story indicates that he was in communion as in a vision with two historic figures of old—Moses, the leader of the slave people of Israel into freedom from Egypt and the giver of the Law or teaching of God, and Elijah, the prophet who challenged the idols which his

くまらずような光が輝き、キリストの容ぼうが変わり、キリストの実体が、世界救済のために命を捧げるべくこの世に現れた神の子であることが明らかとされたとあります。この一節をこの日の朝、私たちは学んでいたのです。

さて、その日の夕刻のことです。作業を終えて帰ってきた私たちは、あのニュースを聞きました。それは、目をくまらずような光が広島の上空に輝き、何万人という人が殺され、不具にされたと伝えていました。その後私は、長崎でも同じことが起こったことを聞かされました。アジアの戦争を終わらせたものがこれだったのです。私たちは、この二つの出来事の不思議な暗合に、雷に撃たれたようなショックを受けました。すなわち、一方は、生命に対するキリストの強い確信、そして万物の生命を守るキリストの自己犠牲の証としてキリストの身に起こった出来事であり、一方は、キリスト教国である一国の大統領が、戦争を早期に終わらせ生命を守るとの期待のもとに、キリスト教徒がイエスの変容を祝うまさにその同じ日に、原子爆弾という暗黒の光を爆発させることを決定したという事実です。この体験は、それ以来私の心に住みつき、そして私に、それまで以上に平和と正義のために働く決意を固めさせました。もっとも、あのときの私には、この私の決意を試すどんな機会が待ち受けているのかは、まだまったく分かっておりませんでした。

私の第三の体験は、1947年の7月、ノルウェーのオスロで開かれた第2回世界キリスト教青年会議に参加したときのことです。この会議には、世界各国から1,300人の若者が参加しましたが、その多くは、互いに敵対する立場で第二次世界大戦に、直接巻き込まれた若者たちでした。また、第三世界から参加した若者たちの中には、政治的、人種の解放の戦いに加わっている者も数多く見受けられました。しかし、この会議には、ある重要な人たち、すなわち、日本からの代表が参加しておりませんでした。米占領軍が、日本の若いキリスト教徒の参加を許可しなかったからです。これをいばげん残念がっていたのは中国の代表たちです。このときの会議のテーマは、「イエス・キリストはわれらが主なり」というものでした。私たちはキリストが、われわれの損なわれた人間性を分かち持ち、われわれが、われわれの生を支配している争いや憎しみの一切を捨て神と和解し、また、人間同士のあいだで和解し合うように十字架にかけられ復活した方として、今でも生き続けているということを確認しました。私たちは、日本の若いキリスト教徒のために、日本人たちのために、熱心な祈りを捧げました。まもなくして私は世界教会協議会(WCC)の青年部委員となり、また後には委員長を務めました。この世界教会協議会は、キリスト者が

people had adopted out of political and cultural expediency and who pointed the people back to the way of holiness and righteousness which alone could bring them true peace. The story says that there was a blinding light which changed the face of Christ and disclosed his true being as the Son of God called to give his life for the salvation of the world.

Well, in the evening when we came back from work, we listened to the news. It told of a blinding light which shone over Hiroshima and destroyed and maimed thousands and thousands of people. We later heard of the similar fate of Nagasaki. That brought the war in Asia to an end. We were thunder-struck by the coincidence of these two events—the experience of Jesus as a sign of his affirmation of life and of his self-sacrifice for the life of the world, and the decision by the President of a Christian nation, on that very day which Christians celebrate, to unleash the light of darkness of atomic bombs in the hope of shortening the war and saving lives. This experience has haunted me ever since and made me more determined than ever to work for peace and justice, though at the time I never knew what opportunities I would have in which to test this determination.

The third experience was at the Second World Conference of Christian Youth at Oslo, Norway, in July 1947. We were 1,300 young people from all over the world. A large number among us had been directly involved in the Second World War on opposing sides. Many of us from the Third World were in the struggle for political and racial liberation. But there was one important delegation missing. It was the Japanese delegation. The American occupying power refused to allow the young Christians to come. None regretted this more than the Chinese delegates. We were meeting under the theme, “Jesus Christ is Lord”, he who shared our broken humanity and who is present as the crucified and risen one to reconcile us all to God and to one another from all the conflicts and hatreds which dominate our lives. We prayed fervently for our Japanese fellow Christians and for the Japanese people. I was a member and later chairperson of the committee of the Youth Department of the World Council of Churches which organised for several years work camps in Japan and in East Asia to make it possible for Christians to live out the message of

「回信による神への帰依」に従って生きていくことができますようにとの意図で、日本と東アジアで、数年間ワークキャンプを続けておりました。私が初めて日本を訪れましたのは1955年のことですが、これは、ほかでもなく、このWCCの青年部事務局員として、また、世界各国のキリスト教徒からの日本の若者に対するあいさつと連帯の意思を携えた者としての訪問でした。

以上の三つの体験は、私の人生と聖職者としての意識に深く刻みこまれております。本日のこの集まりは、諸宗教間の理解と協力を通じて「真に平和的な社会を実現」し、「新しい世界共同体を創造」するという庭野平和財団の目的を称えるためのものですが、私が心からの熱意をもってこの集まりに参加させていただいたのも、以上のような体験に根ざした強い意識に従ったことであります。この機会を利用いたしまして、庭野日敬総裁の偉業に対する、私自身ならびに世界の多くの人々の深い感謝の念をお伝えしたいと思います。庭野師は、1970年に京都において第1回会議を開いた世界宗教者平和会議（WCRP）の創設者の一人でもあり、また、その名にふさわしい庭野平和財団の創設者であるばかりでなく、宗教の自由と世界平和の促進につくしてこられた方です。

私が特に榮譽としておりますことは、国連によって「国際平和年」に定められたこの年に、この「平和賞」の受賞者に選ばれたことです。第二次世界大戦直後、すなわち、広島、長崎直後に生まれた国連は、軍縮と平和に大きな重きを置いております。過去40年間、国連は戦争、軍備、平和、そして戦争の撲滅、人間の尊厳と正義のもとでの人間の幸福、といった重要な問題に取り組むための話し合いの場を提供してきております。しかし、その一方では国連は、厳しい批判の攻撃にもさらされておられ、その多面的な活動も、大国の力によって弱体化されつつあります。とはいえ国連は、あらゆる国、あらゆる人々が、人類の幸福のために発言の機会を得、その力を結集することのできる公的機関として、存在を続けております。信仰を持つ人たちがこれまでこの国連を固く支持し、また、支持し続けているのもこのためです。

世界教会協議会は、1948年のその創設にあたり、戦争は神の意思に反するものである、との力強い声明を出し、各教会に対して国連支持を呼びかけております。世界教会協議会の総会では次のことが明確に表明されております。

紛争解決の手段としての戦争は、主イエス・キリストの教え、規範と両立し得ないものである。今日の国際問題に戦争の占める役割は、神に対する冒瀆であり、人間の墮落である……。いまや戦争は全人類的なものとなっており、男女を問

reconciliation. My first visit to Japan in 1955 was precisely as secretary of the WCC Youth Department and as the bearer of greetings to and solidarity with the youth of Japan from Christians all over the world.

It is in the spirit of these experiences, which have profoundly marked my life and ministry, that I heartily participate in this event today, which celebrates the aim of the Niwano Peace Foundation, which is “the realization of a truly peaceful society” and “the creation of a new world community” through interreligious understanding and cooperation. May I take this opportunity to express my deep gratitude, and that of so many people all over the world, for what President Nikkyo Niwano has accomplished in promoting religious freedom and world peace, not least as one of the founders of the World Conference on Religion and Peace which had its first meeting in Kyoto in 1970, and as the founder of the Peace Foundation which appropriately bears his name.

I feel particularly privileged that I am the recipient of the Peace Prize in the year which the United Nations Organization has designated to be the International Year of Peace. Born as it was just after World War II and Hiroshima and Nagasaki, the UN has given major emphasis to the issues of disarmament and peace. During these past forty years, the UN has provided a forum for grappling with the grave problems of war and the weapons of war and also of peace and all that makes for the absence of war and the well-being of peoples in human dignity and justice. The UN has been heavily attacked and its many-sided work has been weakened by the powerful nations. But it has remained the one public body in which all nations and peoples can get a hearing and can unite their forces for the welfare of humankind. That is why people of religious faith have given and continue to give their loyal support to the UN.

When the World Council of Churches was formed in 1948 it made a strong statement on war as contrary to God's will and called the churches to support the UN. The Assembly of the WCC clearly stated:

War as a method of settling disputes is incompatible with the teaching and example of our Lord Jesus Christ. The part which war plays in our present international life is a sin against God and a degradation of man.... War is now total, and every man and woman is called for mobilisation in war service. Moreover, the immense use

わず、あらゆる人間が戦争行為に動員されている。しかも、大規模な空軍力の使用と原子力兵器その他の新兵器の発明によって、近代戦のあらゆる面において、過去の紛争においては経験することのなかった広範かつ無差別の破壊が不可避的となっている。こうした状況にあつては、正当な目的、正当な手段を伴った正当な戦争というこれまでの概念は、いまや疑いをもって再検討を迫られており……

教会はまた、平和的な改革をおし進め、正義を追求することによって、戦争の原因となるものを攻撃しなければならない。教会は、信義を守り、誓約を尊重する立場に立ち、帝国主義的勢力の圧力に抵抗し、多角的軍縮を促進し、戦争の無益さに対する無関心や絶望と戦い、キリスト者をして精神的抵抗力を身につけさせるべく、導かなければならない。この精神的抵抗力は、多くの人が確固たる信念を抱くことによってはぐくまれ、また、この確固たる信念は、それ自体が強力な戦争抑止力となるものである。精神の空白は、必然的に侵略者を招く。

したがって、当然のことながら、世界教会協議会は、強い信仰とイデオロギーを持った人々との対話活動を通じて、1970年の世界宗教者平和会議の結成推進に何らかの役割を果たしてきたと思います。私は、当時この運動にある種の直接的な責任を有していた関係上、この組織の発展と現在にいたるまでの活動の子細に注目しておりました。世界宗教者平和会議の京都宣言には、次のことが明確にうたわれております。

いまや諸宗教は、その歴史的相違にこだわることなく、真の平和を築く活動にたずさわる者すべての団結をめざすべきであると、われわれは確信するにいたった。

こうした経緯をたどって、世界宗教者平和会議は、現在世界教会協議会と共に、国連の活動に非政府機関（NGO）として積極的に参画しております。もちろん、その背景には、第2回「庭野平和賞」を受けられたホーマー・A・ジャック博士の精力的な活躍があったことを付記しておかねばなりません。NGOの支援活動のごく最近の例としては、国連国際平和年の開始にあたって、1986年1月20—24日に「平和のための団結」のテーマのもとにジュネーブで開かれた国際会議をあげることができます。この会議では、「世界の人人々すべてが平和を求める共通の活動に参加する」ことを呼びかけたアピールが出されております。

この平和を求める共通の活動については、私の先輩であるヘルダー・カマラ大司教、ホーマー・ジャック博士、趙模初師ら



WCC 総幹事就任演説（1972年）

of air forces and the discovery of atomic and other new weapons render widespread and indiscriminate destruction inherent in the whole conduct of modern war in a sense never experienced in past conflicts. In these circumstances the tradition of a just war, requiring a just cause and the use of just means, is now challenged...

The churches must also attack the causes of war by promoting peaceful change and the pursuit of justice. They must stand for the maintenance of good faith and the honouring of the pledged word; resist the pretensions of imperialist power; promote the multilateral reduction of armaments; and combat indifference and despair in the face of the futility of war; they must point Christians to that spiritual resistance which grows from settled convictions widely held, themselves a powerful deterrent to war. A moral vacuum inevitably invites an aggressor.

It was therefore natural that the World Council of Churches played some role, through its programme of dialogue with people of living faiths and ideologies, in helping to facilitate the formation of the World Conference of Religion and Peace in 1970. At that time I had some direct responsibility for this programme and so followed closely the developments of this body and of its work up to now. The Kyoto Declaration of the WCRP said unequivocally:

We are convinced that religions, in spite of historic differences, must now seek to unite all men in those endeavours which make for true peace.

The WCRP has, therefore, along with the WCC, been very active in the activities of the UN as a Non-Governmental Organisation, and no one has been as active as Dr. Homer Jack, the second recipient of this

が、こぞって、雄弁かつ適切に語っておられます。軍縮や平和については、ことさら新しいことを語るのには実際、無理なことです。にもかかわらずわれわれは、人々が耳を傾け、行動を起こすことを期待して、同じことを繰り返し語り続けることをやめるわけにはまいりません。そして、国際活動にたずさわってきた私の経験から言わせていただくならば、1月のNGOのアピールに示された新しい主張は、ここにとりあげてご紹介する価値があると思います。

平和な生活のための社会機構を整えることの重要性にかんがみ、われわれは、教育、科学、文化、宗教およびマスメディアに、ピースメーカーをめざした新しい方向づけを求めらるものである。

ここで生じてくるのが、ピースメーカーとしての共同活動をいかにすすめるべきか、という問題です。

ここで皆さん方に、第1回「庭野平和賞」の授与が行われたのは、1983年3月23日、レーガン米大統領が国家安全保障の問題について歴史的声明を発表した直後のことである、という事実注目していただきたいと思います。このときレーガン大統領は、「人間の精神は、他国や他国の人々に対して、その存在への脅威を与えるような処遇の仕方をしていることに甘んじているのではなく、それを乗り越えて向上していく道を進んでいかなければならないということをますます強く感じるようになった」と語っております。さらに同大統領は、「自由世界の国民が、自分たちの安全は、単にソ連からの攻撃に対する抑止力としての米国の即時報復という脅しに依存しているのではない、ということを知ったならばどうであろうか、即ちわれわれが、戦略弾道ミサイルがわれわれの領土、われわれの同盟国の領土に到達する前に、これを迎え撃ち破壊することができる、ということを知ったうえで、安心して暮らしていけるとしたらどうであろうか」との問いかけを行った後、次のように語っています。

私は、長期的研究開発計画の方向を明確に定め、戦略核ミサイルによる脅威を排除するというわれわれの最終目的の達成に着手すべく、包括的かつ徹底的な努力を傾注するつもりである。これによって、核兵器そのものの廃絶をめざした軍備管理への道が開かれると考える。われわれは、軍事的優位を求めているのでもなければ、政治的に有利な立場を求めているのでもない。われわれの唯一の目的——そしてすべての人々の共有の目的は、核戦争の危険を軽減する道を探ることである。

Peace Prize. The most recent manifestation of the support the NGOs was the conference they held in Geneva on 20-24 January, 1986, to open the UN International Year of Peace, under the theme, "Together for Peace". This meeting issued an appeal "to all peoples of the world to join in a common pursuit of peace".

My predecessors, Archbishop Helder Camara, Dr. Homer Jack, and Mr. Zhao Pu Chu, have all spoken eloquently and adequately on the common pursuit of peace. It is practically impossible to say anything new on disarmament and peace, although we can never stop saying the same things so that people may hear and act. But my international experience has stimulated me to take up the challenge of the Appeal from the NGO meeting in January which stated:

Recognizing the importance of preparation of societies for life in peace, we call for a new orientation in education, science, culture, religion and mass media towards peace-making.

The question which is posed for us is: How do we work together as peacemakers?

I would like to draw your attention to the fact that the first Niwano Peace Prize was awarded soon after President Reagan made his historic statement on 23 March, 1983, on the subject of national security. He said then that he had become "more and more deeply convinced that the human spirit must be capable of rising above dealing with other nations and human beings by threatening their existence." He went on to ask: "What if free people live secure in the knowledge that their security did not rest upon the threat of instant US retaliation to deter a Soviet attack; that we could intercept and destroy strategic ballistic missiles before they reached our own soil or that of our allies?" He then stated:

I am directing a comprehensive and intensive effort to define a long-term research and development programme to begin to achieve our ultimate goal of eliminating the threat posed by strategic nuclear missiles. This would pave the way for arms-control measures to eliminate the weapons themselves. We seek neither military superiority nor political advantage. Our only purpose—one all people share—is to search for ways to reduce the danger of nuclear war.

This statement and what has followed has been

このレーガン大統領の声明とそれに続く一連の発言が、「戦略防衛構想 (SDI)」あるいはもっと一般的に「スターウォーズ計画」と呼ばれるようになったものです。レーガン大統領のこの演説やその後の動きは、米ソ両超大国間の論争の舞台の中心を占めるようになり、事実上、軍縮交渉の後退をもたらしてきたものです。

この問題の専門技術的な面については、私には語る資格はありません。しかし、この問題には、われわれの仕事をこれまで以上に急を要するものとする、ある恐るべき要素が含まれております。まず第一に、専門科学者をすら困惑させ、その意見を分裂させるほどの規模、複雑さ、費用を伴った研究計画が着手されていることがあげられます。第二に、この計画は100パーセント効果的ではあり得ないため、敵の攻撃を思いとどまらせるというその目的が達成される保障もなく、したがって、この構想は、事実上、核兵器競争を激化させている、ということが指摘されます。第三に、これが最も重要なことですが、権威ある科学者たちのあいだでは、レーガン大統領が明らかにしたような目的を達成するには、その決定的瞬間において、人間の意思に頼るよりは、膨大な電子計算機装置の「人工知能」に頼らざるを得ない、という考え方があるように見受けられることです。これは、ヘルダー・カマラ大司教が1983年の「庭野平和賞」受賞に際する講演で述べておられた、ロボット化の危険性についての予言がまさにぴったりとあてはまる状況です。いまや軍備競争は、人類が、自らの防衛と存続のために、自らのつくり出した科学人工物の精密な決断機能に頼らざるを得ない、というところまできております。これは、これまで長いあいだ続いてきた一つの流れが、黙示録の極限に達しつつあることを示すものです。人類は、本来人間的なものであり、本来政治的な問題であり課題であるべきはずのものについて、ますます、技術的解決、あるいは技術装置そのものへ依存するようになってきております。

ユダヤ・キリスト教の教えではこれを「偶像崇拜」と呼んでおり、仏教ではこれを「妄信」と呼んでいると思います。イザヤ書の第44章第9節から20節には、今日のわれわれの状況を見事に描いた箇所があります。これは、強大なバビロニア帝国に捕囚の身となっていたユダヤの人々に向けて書かれたくだりで、いささか長くなりますが、お許しを願ってここに引用してみたいと思います。

偶像を造る者はみな、むなし。彼らの慕うものは何の役にも立たない。彼らの仕えるものは、見ることもできず、知ることもできない。彼らはただ恥をみるだけだ。だが、い

called the Strategic Defence Initiative (SDI) and more popularly named “Stars War”. This speech and its consequences have occupied the centre of the stage in the debate between the two super-powers and have in fact brought about a deterioration in the discussions on disarmament.

I am not competent to speak on the technicalities of this matter. But there are some frightening elements in it which make our task all the more urgent. First, a programme of research has been initiated of a magnitude, complexity and cost which baffles and divides even the scientific experts. Secondly, there is no assurance that it will achieve its object of deterring the enemy, because it cannot be 100% effective. Thus this initiative has in fact intensified the nuclear arms race. Thirdly, and most importantly, there seems to be the belief in the scientific establishment that, to attain the aim enunciated by President Reagan, there may have to be reliance, at the critical moment, on the “artificial intelligence” of massive electronic computer devices rather than on human decisions. This makes very pertinent today the prophetic words concerning the dangers of robotization by Archbishop Helder Camara in his acceptance speech of the Niwano Peace Prize in 1983. The arms race is reaching a point where human beings may have to rely on the exact, deciding functioning of their own scientific artifacts for the defence and preservation of the human race. This is the apocalyptic limit of a tendency which has been long observed. Human beings are depending more and more on technical solutions and even on technical devices for what are basically human and political problems and challenges.

The Judeo-Christian scriptures call this idolatry and Buddhists would say delusion. There is a passage in the Hebrew book of Isaiah, chapter 44 and verses 9 to 20, which describes well where we are today. I ask your patience as I quote this rather lengthy passage written to the Jewish people in forced exile in the all-powerful Babylonian empire:

All who make idols are nothing, and the things they delight in do not profit; their witnesses neither see nor know, that they may be put to shame. Who fashions a god or casts an image, that is profitable for nothing? Behold, all his fellows shall be put to shame, and the craftsmen are but men; they shall be terrified, they shall be put to shame together.

つたい、何の役にも立たない神を造り、偶像を鑄たのだろう
か。見よ。その信徒たちはみな、恥を見る。それを細工した
者が人間にすぎないからだ。彼らはみな集まり、立つがよい。
彼らはおののいて共に恥を見る。

鉄で細工する者はなたを使い、炭火の上で細工し、金槌で
これを形造り、力ある腕でそれを造る。彼も腹がすくと力が
なくなり、水を飲まないで疲れてしまう。木で細工する者は、
測りなわで測り、朱で輪郭をとり、かんなで削り、コンパス
で線を引き、人の形に造り、人間の美しい姿に仕上げて、神
殿に安置する。彼は杉の木を切り、あるいはうばめがしや榎
の木を選んで、林の木の中で自分のために育てる。また、月
桂樹を植えると、大雨が育てる。それは人間のたきぎになり、
人はそのいくらかを取って暖まり、また、これを燃やしてパ
ンを焼く。また、これで神を造って拝み、それを偶像に仕立
てて、これにひれ伏す。その半分は火に燃やし、その半分で
肉を食べ、あぶり肉をあぶって満腹する。また、暖まって、
「ああ、暖まった。熱くなった」と言う。その残りで神を造
り、自分の偶像とし、それにひれ伏して拝み、それに祈って
「私を救ってください。あなたは私の神だから」と言う。

彼らは知りもせず、悟りもしない。彼らの目は固くふさが
って見ることもできず、彼らの心もふさがって悟ることもで
きない。彼らは考えてもみず、知識も英知もないので、「私
は、その半分を火に燃やし、その炭火でパンを焼き、肉をあ
ぶって食べた。その残りで忌みきらうべき物を造り、木の切
れ端の前にひれ伏すのだろうか」とさえ言わない。灰にあこ
がれる者の心は欺かれ、惑わされて、自分を救い出すことが
できず、「私の右の手には偽りがないのだろうか」とさえ言わ
ない。

—「新改訳聖書刊会」訳による—

この悪魔的偶像崇拜という状況を前にして、現実を信じる者、
すなわち、普遍的善をめざした人間相互の関係、世界に対する
人間のかかわりについて、人間に全面的責任を課すところの真
実を信ずる者にとって、なすべき仕事とはいったい何でありま
しょうか。その仕事は、相互に関連する二重の仕事です。その
仕事とは、まず人間の生活、人間相互の関係、国と国との関係
を損ねる偶像崇拜と虚偽を暴き、それを取り除くことであり、
さらに相互尊重、信頼、分かち合いにもとづいた生活を実現す
るために、人間の誠意、尊敬、責任および創造力を高めるう
えで助けとなるあらゆるものを、態度、言葉、行動をもって推し
進める、ということです。これが、平和のための共同作業者と
してのわれわれの使命です。

The ironsmith fashions it and works it over the
coals; he shapes it with hammers, and forges it with his
strong arm; he becomes hungry and his strength fails, he
drinks no water and is faint. The carpenter stretches a
line, he marks it out with a pencil; he fashions it with
planes, and marks it with a compass; he shapes it into
the figure of a man, with the beauty of a man, to dwell
in a house. He cuts down cedars; or he chooses a holm
tree or an oak and lets it grow strong among the trees of
the forest; he plants a cedar and the rain nourishes it.
Then it becomes fuel for a man; he takes a part of it and
warms himself, he kindles a fire and bakes bread; also he
makes a god and worships it, he makes it a graven image
and falls down before it. Half of it he burns in the fire;
over the half he eats flesh, he roasts meat and is satis-
fied; also he warms himself and says, "Aha, I am warm,
I have seen the fire!" And the rest of it he makes into a
god, his idol; and falls down to it and worships it; he
prays to it and says, "Deliver me, for thou art my God!"

They know not; nor do they discern; for God has
shut their eyes, so that they cannot see, and their minds,
so that they cannot understand. No one considers, nor is
there knowledge or discernment to say, "Half of it I
burned in the fire, I also baked bread on its coals, I
roasted flesh and have eaten; and shall I make the
residue of it an abomination? Shall I fall down before a
block of wood?" He feeds on ashes; a deluded mind has
led him astray, and he cannot deliver himself or say, "Is
there not a lie in my right hand?"

In face of this condition of demonic idolatry, what
are the tasks of people who believe in a reality which
places full responsibility on human beings in their rela-
tions with one another and with creation for the com-
mon good? These tasks are two-fold and are interre-
lated. They consist in exposing and exorcising the idola-
tries and lies which bedevil the life and relations of
persons and nations, and in promoting by attitude, word
and act, all that makes for human integrity, dignity,
responsibility and creativity for a life of mutual respect,
trust and sharing. That is our calling as workers
together for peace.

First, we must expose and exercise the idolatry of
believing that only in the power of things is our salva-
tion as human beings and as nations. For the past two
hundred years, since the first industrial revolution
began, there has been a marked drift to a materialistic
approach to life. Human beings, confident in their scien-
tific and technological power, have given themselves

第一にわれわれは、人間として、国としてのわれわれの救いが物質的な力にのみ存するとする偶像崇拜性を暴き、これを排除しなければなりません。第一次産業革命が始まって以来の200年間、生活に対する取り組み方が物質的な方向に流れる傾向が顕著になりました。人類は、その科学技術の力を信じるあまり、物の生産、資本と富の蓄積に専心するようになりました。また、武力的優位性をもって、領土や人間を征服すること、あるいは、日本や中国に対して行われたように、自分たちの製品に対して門戸を開き、その国の天然資源の利用を許すよう強制することに専念してきました。そして、およそ100年ほど前の第二次産業革命の始まりを契機として、帝国主義の時代が始まり、日本もまた帝国主義者の仲間入りを果たしました。あの時代はまた、軍備競争が激化した時代でもあり、第一次世界大戦においてそれが頂点に達し、また、科学的唯物論と称するものにもとづくイデオロギーの帝国主義国家、ソビエト連邦が新たに誕生した時代でもあります。それから30年後、世界はさらに致命的な戦争に突入するわけですが、この戦争は、物質主義と攻撃的なナショナリズムへの依存が強まった結果として起こったものです。アウシュビッツ、広島、長崎は、この物質主義的偶像崇拜の象徴です。

しかも、その後の40年間で振り返ってみても、世界はさらに物質の支配に深く捕らわれた状態にあります。現代は、国民総生産と消費主義という偶像の支配する時代です。コンピューター、エレクトロニクスを土台とする第三次産業革命によって、もはやわれわれは、自分たちのつくる製品やそれを用いて行われる自らの営みに、ついて行けない状態になっております。世界の経済や金融体制はすでに解体しています。一国内、あるいは国際間においても、富める者はますます富み、貧しい者はますます貧しくなっております。言葉に言い表すことのできない苦悩が地球上を支配しています。貧しい者、虐げられた者は、飢餓、人種差別、性差別、階級支配、不安定、戦争によって苦しめられています。金持ちもまた苦しんでいます。彼らは、官僚主義的不毛性と精神的空虚さに倦み、あるいはそのとりこになっているからです。大地も大気も汚染され、生態系は大きく乱れています。超大国間のイデオロギーの対立、また、好むと好まざるとにかかわらずその同盟国となっている国々のあいだでのイデオロギーの対立も大きくなっており、一方、究極的にはその防衛力、攻撃力に依存するという点においては、これらの国はますます似通ったものとなっております。人類はいま、自滅に向かって盲進しているかのようと思われるます。

こうしたことは、すべて、人間の欲望、物に対する欲望、そ

over to putting their faith in producing things, in accumulating capital and wealth, in conquering lands and peoples through superior arms or forcing countries, including China and Japan, to open their doors to their products and to allow the exploitation of the natural resources of those countries. As the second industrial revolution got underway about a hundred years ago, we had the age of imperialism, with Japan joining the imperialist club. That age was also the period of the growing arms race which culminated in the First World War and the emergence a new ideological, imperialistic state, the USSR, based on what it called scientific materialism. Thirty years after, the world was plunged into a more lethal war which was the result of intensified reliance on materialism and aggressive nationalism. Auschwitz, Hiroshima and Nagasaki are the symbols of this materialistic idolatry.

And yet, these past forty years have seen the world more deeply caught in the domination of things. Ours is the age of the idols of the Gross National Product and of consumerism. The third industrial revolution, based on the computer and electronics, has shown that we are no longer able to keep up with the things we produce and what we do with them. The world economic and monetary system has broken down. The rich become richer and the poor become poorer both within and between nations. Untold suffering reigns on the earth. The poor and the oppressed suffer because of hunger, famine, race, sex, and class domination, destabilisation, wars. The rich suffer because they are bored or are trapped in bureaucratic sterility and psychic emptiness. The earth and the atmosphere are being polluted and the ecosystem has been greatly disturbed. The ideological divide between the super-powers and their willing or unwilling associates has become greater, while they become more alike in their dependence on the ultimate instruments of defence and attack. The human race seems hell-bent on its own self-destruction.

People of faith know that the root of all this is human desire, the lust for things and for the power which things give to some over others. People have to be helped to see these things not as isolated phenomena, but as one vast idolatry which threatens to annihilate the human race. Peace stands for integrated wholeness. The idolatry of things stands for fragmentation and for

して、物質的な物を通じて特定の人間にのみより多くを与える権力に対する欲求、に根ざしたものであることは、信仰を持つ者には誰にもよく分かります。こうしたことは、けっして局部的な現象ではなく、人類全体を破滅に導く恐れのある、途方もなく大きな偶像崇拜であることを、人々に悟らせる必要があります。平和とは、統合化された完全性を意味するものです。一方、物に対する偶像崇拜は、分裂と空虚をもたらします。ピースメーカーたらんとする者、平和のために共に働こうとする者は、自分自身がこのまん延する偶像崇拜といかにかかわっているかを深く再検討してみる必要があります。われわれは、われわれの豊かな信仰からあらゆる知力、知識を引き出し、それを駆使して働かねばなりません。人々を教育するあらゆる機関、団体に働きかけ、それを動かし、人間がその本来の関係、すなわち、死ではなく、生の方向に物が生産され管理され動かされていくよう、人々を導いていかねばなりません。物質的な物によって少数の人間が大多数の犠牲のうえに富むような方向ではなく、物があらゆる人間に奉仕するような方向、そして、われわれすべてが、物質的所有や利己的な欲望に捕らわれた状態から自分自身を解放するための精神力を養い得るような方向に、人々を導かなければなりません。この地球という惑星が生き残る道はただ一つ、真の意味で人間らしい生き方とはどういうことであるかを自覚し、それを行動に現すことです。真に人間らしいということは、平和のうちに生きること——完全に自分自身であり、しかも、共に幸福を追求するという共感をもって広く他人を受け入れることです。この幸福は、奪い取るものではなく、与えかつ与えられるものとして、共有されるべきものです。

第二に申し上げたいことは、われわれは、国家安全保障という偶像崇拜を暴き、それを排除しなければならない、という点です。国家安全保障というのは、古い物の考え方を現代的な形で表現したものにすぎません。すなわち、「正しかりょうと間違っていないと、これは私の国だ」といった意識です。これは、一国の利害、あるいはその国を支配する者の利害が、その国と他国との関係を律すると主張するドグマです。これは、国内的にも国際的にも、相互関係を毒する集団エゴイズムの一形態です。この集団エゴイズムは、その意思、そのやり方を自国民、他国民に押しつけたいという衝動に抗しきれなくなるはずのものです。ここから世界の不安定が生じます。これは、特に、前にお話しした物質主義的偶像の支配する状況を考えてみれば、よく分かることです。

国家安全保障の有する偶像崇拜性を明らかにするにあたって、

nothingness. If we are to be peace-makers and work together for peace, we must ourselves go through a profound re-examination of our own involvement in this pervasive idolatry. We shall have to work with all the wit and wisdom we can command, drawing from the rich resources of our faith, to mobilise and vitalise all the institutions which can educate people to put the human in its proper relation of producing, controlling and guiding things in the way of life rather than of death; of serving people everywhere rather than of enriching a few at the expense of the rest; of enabling us all to develop a spirituality which liberates us from the captivity of our pathetic attachment to our material possessions and selfish desires. The only hope for the survival of this planet earth is the awareness and manifestation of what it means to be truly human. And to be human is to be in peace—to be fully ourselves and to be open to others with the compassion which seeks the well-being which we share with them as something not to be grasped but to be offered and received.

Secondly, we must expose and exercise the idolatry of national security. National security is the current way of expressing an old attitude: "My country, right or wrong". It is the dogma which asserts that the interests of a nation, or of those who govern it, dictate its relations with other nations. It is a form of collective egoism which poisons relations both within the nation and with other nations. For this collective egoism cannot resist the urge to impose its will and way on the people within the nation and on other nations. Hence the great instability in our world, especially when we bear in mind what has just been said about the domination of materialism.

In exposing the idolatry of national security, there are some of its characteristics which need to be named. Perhaps the most important and dangerous characteristic is projecting an enemy image on other countries. Their weaknesses, their ideological commitment, their own violations of human rights are exaggeratingly presented by the media. There is a manipulation of information and a selectivity of what is to be disclosed which confuse people and produce a psychosis of fear and mistrust. The enemy nation is portrayed as the incarnation of evil. Indeed, the power élite of our own countries, in the interests of national security, carry out

その特性のいくつかを述べておく必要があります。その最も危険な特性は、おそらく、他国に対して敵のイメージを投影させることであろうと思われます。他国の有する弱点、他国のイデオロギー的取り組み方、他国の人権侵害が、マスメディアによって誇大に宣伝されています。ここには情報の操作があり、知らしむべきものの選択が行われ、その結果として国民は惑わされ、恐怖と不信による錯乱状態がもたらされています。敵国は悪魔の化身として描かれます。事実、われわれの国の権力者たちは、国家安全保障の名のもとに最も重要な事柄を意のままに操っており、これが、目に見えないところでわれわれの生活や未来を支配しております。見えざることで決定が下され、一般の人々には、現実が起こっていることはあまり関係のない事柄だけが明らかにされます。国家安全保障の偶像崇拜性は、虚飾に包み隠されています。

しかも、対立する当事国の双方が、その方法こそ違え、同じことをするため、分極化はますます激しくなり、世界中が軍国化するという結果となっています。軍国化は、国内的には人権侵害をもたらし、公共の問題に対する一般国民の関心を急減させます。一般国民は無知の状態にとり残され、あるいは、問題の複雑さに惑わされ、考える能力、発言する能力、そして責任をもって行動する能力を麻痺させられてしまいます。対外的には、軍国主義化は核兵器、従来兵器による軍備競争の形態をとります。現在では、「相互確実破壊力」（これは、いみじくも、英語の頭文字をとって MAD、すなわち間違いと呼ばれております）が抑止力として働くとはされていますが、しかし、抑止力というものは、相手よりも先に攻撃したいという誘惑に屈する可能性をはらんだものです。たとえ、核戦争においては勝者というものは存在しない、ということが十分に認識されていたとしてもです。しかも、大国は、核兵器の有する抑止力によって世界戦争を回避し得ると主張する一方、主として第三世界において、第二次大戦以来150件を超える戦争に直接的、間接的にかかわっており、幾千万の人の命を奪ってきております。こうした戦争や紛争によって大きな混乱や損失がもたらされ、世界の平和が脅かされております。すなわち、国家安全保障の偶像崇拜性によって、国家的、国際的な非安全性が高まるという状況がもたらされているわけです。

以上、国家安全保障の偶像崇拜性についてお話してまいりましたが、この問題は、1984年の10月29日から11月2日にかけて、WCCの「国際問題に関する教会委員会」が東京近郊で開いた「北東アジアにおける正義と平和に関するエキュメニスト協議会」において激しい討論の対象となった問題です。私自身は

the most important affairs, which affect our lives and our future, in secrecy. Decisions are made in secret, and what is given out to the public has little to do with what is really happening. The idolatry of national security is covered with a panoply of lies.

And since both sides in conflicts do much the same things, though in different ways, there is greater polarisation leading to a situation of the militarisation of societies the world over. Internally, militarisation involves the violation of human rights and the sharp decrease in the participation of people in public affairs. The people are left in ignorance or are baffled by the complexity of the issues in such a manner as to be paralysed as regards their capacity to think, speak and act responsibly. Externally, militarism takes the form of the nuclear and conventional arms race. We have arsenals of mutual assured destruction (very appropriately called MAD) to act as deterrence. But deterrence means the possibility of yielding to the temptation of first strike, even if it is perfectly well known that no one can win a nuclear war. Moreover, the great powers, while claiming the absence of global war as due to deterrent nuclear arms, have been engaged directly or indirectly in over a hundred and forty wars since World War II, mainly in the Third World, claiming tens of millions of lives. These wars and conflicts have created a situation of great instability and deprivation which threatens the peace of the world. The idolatry of national security has led to greater national and international insecurity.

What I have tried to describe on the idolatry of national security was the subject of agonising discussion at an ecumenical consultation on Justice and Peace in North East Asia, organised by the WCC Commission of the Churches on International Affairs, which was held near Tokyo on 29 October - 2 November, 1984. I participated briefly at this consultation. One of the findings of this meeting was:

The churches of North-East Asia continue to be victims of exaggerations and distortions of the realities of neighbouring peoples, separated parts of their own people and even fellow-citizens. Particular attention needs to be given in this region to overcoming stereotypes, prejudice, imposed enemy-images, inflammatory anti-imperialist rhetoric, and facile anti-communism which does not recognize the humanity of those on the opposing side.

この協議会にほんのちょっと参加した程度ですが、この会議から得られた結論の一つとして次のことがあげられます。

北東アジアの教会は、依然として、近隣地域の人々、地域内の別の場所に住む人たち、あるいは同国民についてすらも、その現状に関する、誇張されゆめめられた情報の犠牲となつてゐる。この地域においては、定型化した物の考え方、偏見、押しつけられた敵国イメージ、扇動的な反帝論法、そして、相手側の人々の人間性に対する認識を欠いた安易な反共主義を打破すべく、特別の配慮が必要とされなければならない。

以上のことを考えた場合、この国家安全保障の偶像崇拝性を暴き排除するうえで、強い信仰を抱く者としてのわれわれは何をなすべきでしょうか。まず第一に、この国家安全保障の偶像崇拝性を温存し、聖域化してきたという点では、これまでの宗教、あるいは今日の宗教ですらも、共犯者であるという事実を、率直かつ真摯な気持ちで相対する必要があります。これまでわれわれは、一般の人たちには慰撫するような言葉を与え、あるいは、従順かつ受動的な市民となるよう説き、権力者側に加担する傾向がありました。そこでわれわれ自身が、これまでの深い信仰の伝統にこだわることなく、真の安全保障を推進するうえでより建設的な役割を果たし得よう、われわれ自身の考え方を改める必要があるのです。そしてこれは、異なった宗教に属する人たち、すなわち正義と平和のもとに相互依存的な世界共同体の実現に取り組んでいる他宗教の人たち、との対話と協力によってのみ可能となるものです。

さらに明確に述べるならば、われわれに求められていることは、国家安全保障の名のもとに語られる虚偽を暴くことです。われわれの信仰は、そのいずれを問わず、嘘をつくことを戒めており、真の人間性に到達する道は、真実を語り、真実に生きることであると明確に説いています。ユダヤ・キリスト教には、古くから、真実を意味する二つの言葉があります。一つはギリシャ語で“*aletheia*”といい、これは、隠されていない、閉じられていない、あるいは覆われていない、あからさまにされた、覆いをとられた、開かれたという意味です。ヘブライ語では、“*emeth*”といい、信頼、信頼するに値すること、忠誠、忠実であることを意味します。真実とは、開かれた信頼のきずなによって人間関係を律するものです。これは、対話を進めることであり、生命ある人生を共に生きることです。これは、人々が、情報を与えられ、情報を求められ、そして、知性をもって決断を下すことのできる状況のもとに、自分の属する共同体内において、また、他の共同体、他の文化に属する人々との協力のもと



世界宣教と福音委員会委員長(1967—72年)時代、同僚と

What then are the tasks in exposing and exorcising the idolatry of national security for us as people of living faiths? Our first task is to face openly and honestly the complicity of religions in the past and even now in maintaining and sanctifying the idolatry of national security. We have tended to be on the side of the power élite while speaking words of comfort to the people and even exhorting them to be obedient, passive citizens. We ourselves will have to allow our deepest traditions of faith to so permeate and renew our minds that we may play a more constructive role in promoting true security. And we can only do this through dialogue and cooperation between people of different faiths who are committed to the goal of one interrelated world community in justice and peace.

More specifically, we are called to expose the lies which are told in the name of national security. All our faiths denounce telling lies and proclaim that the path to true humanity is telling and living the truth. In the Judeo-Christian tradition there are two words for truth. The Greek word is *aletheia*, that which is not hidden, not closed or covered up, but rather revealed, disclosed, uncovered, open. The Hebrew word is '*emeth*, trust and trustworthiness, faith and faithfulness. Truth is that which should govern human relations when there is open trust. It is the way of dialogue, the sharing of life with life. This can only happen when people can participate at all levels in the life of their communities and with the people of other communities and cultures, through being informed and consulted and being enabled to make intelligent decisions. It is only when truth becomes a

に、あらゆるレベルの活動に参加することができるようになって、はじめて可能となるものです。また、真実が現実のものとなったときにのみ、すべての人が物の力から解放され、軍備の厚い壁で互いを隔離し合うことをやめ、互いに語り合うことが可能となります。アフリカには、「語ることは愛することである」という意味の言葉があります。かのユダヤ人哲学者マーチン・ブーバーは、自身の名付けた「われわれの世界を支配する悪魔的力、基本的な不信という悪魔的なもの」について深く思索し、それから得られた悟りを次のように語っています。

戦争には、常にこれと相対する力が働いていた。その力は、これまで前面に姿を現したことはほとんどなく、静かにその役割を果たしてきたものである。この戦争に反対する力とは、言葉、満たされた言葉、真の対話における言葉である。この真の対話においては、人は互いに理解し合い、相互理解の状態に到達する…。真の対話においては、それに参加する各人は、たとえ相手と対立する立場にあるといえども、実存する他者として相手を心して遇し、受け入れ、承認する。

また、1959年に故アイゼンハワー大統領の語った次のような新鮮な言葉を思い起こすとき、心強いものを感じます。

長い目で見れば、政府よりも国民のほうが平和の推進に役立つことをするというを私は信じたい。事実、私は、国民がこれほどまでに平和を望んでいるのであるから、いずれは政府も、国民の邪魔をすることをやめ、彼らにまかせておくほうがいいと考えている。

これは、われわれ種々の宗教に属する聖職者たちが、あらゆる場所、あらゆる機会に、説教、講義、カウンセリング、証言などを通じて広く語り伝えるべき言葉です。

なかならず、普遍性を信じ、人間と物との相互関係を固く信じるわれわれとしては、人々が国家安全保障を越えた共通の安全保障をめざすことができるような状況をつくり上げなければなりません。これについては、あの残忍かつ無意味な殺人によって非業の死を遂げられた、故オロフ・バルメ・スウェーデン首相も語っていたことです。バルメ氏は、自身の公的生活においてこの共通の安全保障を具体的に推進し、「軍縮と安全保障問題に関する独立委員会」（通称「バルメ委員会」）の議長を務められました。バルメ氏は、世界教会協議会が1981年に開いた「核軍縮問題に関する公聴会」において、共通の安全保障について次のように語っています。

国家安全保障は、国際的な非安全保障につながるような政

reality that women and men will gain their freedom from the power of things and learn to speak with each other rather than build heavily armed barriers against each other. There is an African saying: “To speak is to love”. That wise Jewish thinker, Martin Buber, who reflected a great deal on what he called “the demonic power which rules our world, the demonry of basic mistrust”, expressed his convictions thus:

War has always had an adversary who hardly ever comes forward as such but does his work in the stillness. This adversary is speech, fulfilled speech, the speech of genuine conversation in which men understand one another and come to a mutual understanding.... In a genuine dialogue each of the partners, even when he stands in opposition to the other, heeds, affirms, and confirms his opponent as an existing other.

It is enheartening to recall the refreshing words of President Eisenhower in 1959:

I like to believe that people in the long run are going to do more to promote peace than our governments. Indeed, I think that people want peace so much that one of these days governments had better get out of their way and let them have it.

This is what women and men of different faiths are called to promote in their preaching, teaching, counseling and witnessing in every place and at every opportunity.

Above all, we who believe in universality and the interrelatedness of people and things must enable people to go beyond national security to common security. We owe this phrase to the lamented Olof Palme, who was so brutally and senselessly murdered recently. He headed an Independent Commission on Disarmament and Security issues, as one who embodied the promotion of common security in his own public life. He described common security at a public Hearing on the Challenge of Nuclear Disarmament, organised by the World Council of Churches in 1981, as follows:

National security cannot be achieved by policies that lead to international insecurity. For if the world as whole is insecure, the individual nations cannot be secure. Security is a common responsibility: one nation's security cannot be achieved at the expense of other nations. It must be achieved together, with the prospective adversary—not against him. Security must be sought in cooperation—regionally and globally—instead

策をもってしては実現することはできません。なぜならば、世界全体が安全でない限り、一国の安全もあり得ないからです。安全保障は共通の責務です。一国の安全保障は、他の国の犠牲にしては達成されません。安全保障とは、仮想敵国に対するものではなく、仮想敵国をも含めて共同で達成されるべきものです。安全保障は、対抗意識や軍事的優位性を追いつめる形ではなく、地域的、全地球的な協力のものに追求されるべきものです。核時代にあっては、これは絶対不可欠の要件であります。

このことは、1983年の世界教会協議会第6回総会の声明にも次のような形で表明されております。

共通の安全保障とは次のことを意味するものである。

- a) すべての国および国民の正当な権利を尊重すること。
- b) 開かれたコミュニケーションを通じて異文化間、諸宗教間、各イデオロギー間の相互理解と正しい認識を促進し、不信と恐怖を広める宣伝を排し、信頼確立の手段をおし進めること。
- c) 科学、技術、経済、文化面における広範な国際協力。
- d) すべての経済体制を、軍事生産から非軍事生産へと転換させること。
- e) 国連機構その他同種の目的を有する国際団体・機関を活用し強化すること。
- f) 適切な国際法体制を推進し、国際紛争の裁断と裁決事項の実行手段を整えること。
- g) 国際紛争の平和的解決のために、より効果的な機関を設けること。

1982年の世界軍縮会議では、平和とは分割不能のものである、と宣言されております。事実、平和は生命と同様分割不能のものであります。信仰を持つわれわれは、世界全体の生命が、あらゆる次元において、一つに統合されて完全な全体となるべきであると信じております。今日、われわれは、かつてない人間性の危機の時代に生きております。これは、ここ北東アジアに限ったことではありません。しかし、危機とは、漢字で表せば危険と機会を意味します。われわれのなすべきことは、人々が、恐れることなく危険を察知し、それを理解し、かつ、正義と平和のもとに相互尊重、信頼、分かち合いを推し進める機会に勇気をもって取り組むことができるようにすることです。いまこそ、われわれが、信仰と希望と愛をもって、協力してこの仕事に取り組むべきときです。

of in rivalry and search for military superiority. These are imperatives of the nuclear age.

This was spelt out by the Sixth Assembly of the World Council of Churches in 1983 in the statement:

Common security implies:

- a) respect for the legitimate rights of all nations and peoples;
- b) promoting mutual understanding and appreciation among cultures, religions and ideologies, through open communication, rejecting propaganda of mistrust and fear, and promoting confidence-building measures;
- c) broad international cooperation in science and technology, economy and culture;
- d) conversion of all economies from military to civilian production;
- e) using and strengthening the UNO and other international institutions with similar objectives;
- f) promoting adequate international legislation and providing means for adjudication of international disputes and for implementation of decisions;
- g) making the machinery for peaceful settlement of international conflicts more effective.

At the World Conference on Disarmament in 1982 it was declared that peace is indivisible. Indeed, peace like life is indivisible. We who are women and men of faith believe that all the dimensions of life in the whole of creation need to be brought into an integrated whole. We are living today in a time of unprecedented crisis for humanity, not least here in North East Asia. But crisis, as the Chinese characters indicate, is both danger and opportunity. Our task is to enable people fearlessly to perceive and comprehend the danger and also to seize boldly the opportunities for promoting mutual respect, trust and sharing in justice and peace. This is one occasion when we together commit ourselves to this task in faith, hope and love.